此義は近頃文舎の為めに
る不菲茅の流を以て色
料に供しそれ
で偶と山者
とそれ杉板を
点こむて行し且つ
せて行を家に義すと

湖亭

暑休暇を機として北海の風
来と共に来れる人々
いつも有り来る山人
昔と一の愛人に旅をすすめ
ありてやめ旅を
の事なれば
果をこの金を
信州路沿のそれ
川を遡あと
めの清と信州
と決し八月十二日朝の
四時ときき山の
送りそれ
何の事なき初め
めるも
の此アプト式を
二十丁の
る狭き
あるこの雲

うばひ狂ひたるやうにして、よろこび四方に
あるくとの雪霰をとりんとて和尚の心を
奪ひ給ひ雪の雲しきを思ひ別り雪の
降るを折まもえくもるを元の梅が
まひ給ひ十時ばかり汽車の乗つめて飽
きたるを別れ絶きくるうとの
大元氣、元のみをて抜くうくく
図らずも暗くくくぐり光めの天元
て元の事ばかり氣さまし此の年
月の怪海の後を元つて後もなれ
後めば元和の折コンナものの人
を捉ふとなくて思うして一冊後文ろり
図らずの年の秋清を拾ひ志ろしを
元和氣をくくく祇仏界をくくの
平あの後方を思あて蒼穹梅が
下車しうれて知る旅館を投す沖
山右を泊まるを又行の志氣あ
る平あるくを右をもるくく孤らと
又くて行るを行るを沖るそるを早
や次きの右を元を出すを行ると
入沖海くく海くくを拾く並
いくくく紀子四人の図乗おるんどこみ
恰好の家屋此を子めおを遠意
ろくく峰をを後し一人旅び
の寂寞に似ずるくくく興味深く
如を味めを使をの旅の現味を感
しの

如き味を味はひ
しめ
望郷の念新子めを抱かせ
故郷を捨てて一路
以又流転に移して
原山入れば来田千里眼界迷んとす長
いる女と田舎の素山子を見て何と問
ひ掛けるきまを知て来のるる木を見て
バンえ子出生る笑ひ
つるる騒きまを知て
てプラットフォームの
ようを動ちるを
して
十二時をきこえる
流を行く
傳流のうて田
ゴム輪車の
染オをゴム輪車の
章して
つぶやくと
コツコツ
表の意コツコツ
漸く
織物
きんとする
市中
延長一年四月七十

寺中雑工事とかこゝろ大鐵橋ゝ
延長一千四百七十餘尺陸路江のそんのうち
長うき松ゝ花のかゝ枝くこんこう元禄の
大鐵橋也此ゝの風色も舊のまゝなんど咲
こ新〳〵ら梅枝ゝ嶋しそゝ此の光景
ゝし乃の入口ゝ子めを車ゝ
おろし家々を子めゝ
あまのゝとゝゝし先づ鐵橋の踏切り
の道照を過て大ゝ角屋敷を指
しこんを作る伊達の門ゝの邸ゝと
示し此の屋敷を指ゝ金の舊
屯の後ゝ入回りゝ北ゝい
つしか拾数ゝ裏つも元り殿
はゝん堀ゝ繁ゝ橋ゝ咲ゝ
花ゝゝゝいかゝゝ別ゝき
楽淡の表ゝゝ言ゝの感
ゝ新ゝゝ性別ゝ
この道舊屯ゝと咲めゝ
ゝゝめ〳〵行けば宗家の舊邸
を右手ゝ咲ゝ咲めゝこ
ふこんこを清水家の舊屯也成辰
の別ゝゝ掘ゝ掘ゝ
ゝゝ別荘ゝゝ
ゝも舊家の舟流方ゝ入
咲めのゝゝ桂藤を
つゝゝ咲め文ゝ口ゝ
ゝうまし〳〵と賞賛ゝ
あんの生んゝの菓子の味を
ひゝゝと茅ゝめゝ味の自慢
を言ゝゝ子めの笑ゝ

おのの生んだ所の菓子の味を授ける
びちゃくちゃと菓子の味の自慢
をこのて子めの笑いつる形原を解し又
車を地にて行くこんとも眼界奈
庵〳〵一路乗田を地志の文吹き新
しき元男子を新設緑原の悦姫
として田舎を捨きと時に貴車の
庶美して麻実を抜ける天王
村と雲家のつを色きき車を結めて
ぶるさし手して立寄りまして
茂田と別り高橋原に投す
菩提寺を花色うきと五十公爵と桜
十五男と云へ長男の長原と南又三
男男雄の十七田長と南る此の寺は
話ひ仏寺を生まんと拾て羽朝を
ひるの時をのくるをこい朝の夜
車を連れて高原を出づ御伝神社
の前をこぎこしもめのかるさる
と聞車して橋内の文一拝の夜祭
の終る手を設けん〳〵縁原の停車
橋を渡り又車を地にて五十公爵の
海合寺と別る此の男代墳墓の
地 子めの事あるを初生るんが山
上山下の寺祖先の墳墓をんが南西
しを流き花を献し仏の車を人々
合しを墓地を掃ひてしめ廃墓終つ
て寺僧と談話を行い那書を解ん
新家田と別る此の年終雪寺に向け
黄すこんが雪寺を一山あるを山は

新蕎麦田と海の午後一雪降る向け
昔すこん雪降る一歩毎の山の
入る都つの光景の日暮れ子めて
山間の風光珍しくしと色こがこと
なし大橋峠のきりを投路急ぐ
志賀道を横切る風光一入の光景
路と車ともあり橋を渡りそこの光
の奥を動けるもの忘れ難き光景
の思ひそこの思ひ出雪降る蕎麦
そこ蕎麦所亜の庵に入る
子めを家をゆくもそこの初冊の勝ひと離
れず書の行のひをしく蕎麦と語る
蕎麦を美味を絶の味を問ひ…
おとつさんもいらっしゃりましたで
あらうことおのれ移だて叱られ
の地を先の為也と切れ共に氣
ることに一天寒さ冷き冊
美ともさと人を老いさん庵結
ることは是如自分事
こんど冊の例切
庵を泊まることを晩
を作り冊美を詩の
村跡さんしの起
こう元早蕎麦
を乗こ比べ
る村内の切人中
り物文を通信天
望十二を掛橋
の前を流れ

望十二月を指て起き出て
の前を流れて市川
瀬き清流を
七尾の城井を近
いつて名高き清水あり
みめ美きの水を汲
す清水を
巣す出んで庵の焼内に於て
家鬼釜を
初めて見る二基の養
んば一を上山谷一
上魚谷と
流の源を
食を持て
海の挿花を
七尾を守護
碁盤
無き能はざる
の比こうし
満目の海漢
意いつしか
住る牧畠の
愛しき
飛鳥の
子あを
時代の
借りて
碁を
碁盤
寝室

此代の国恵うて此家余こと年あの比
借うて数年信をもちて不余を於国
部を渉うて高の家前妙り迄之
こと堂或寝室祖母の宝をもて
時元掛えて意のの拾拾をもて
癒のこと〻〻〻〻〻〻〻〻を此憶
毒のの或脱無き陸ハさ 御文庫 偽冊
但業傳前来ちも金前を今七き
こ二十数年久潤寺乃ちを祝
し此書畫を拾して余山
芸業を有ることを
偽こと一拾治を翌
を倒こと於冊美
治の遣治こと
治直こと解しこと
以也況入進三を給
す乃ち翌朝治を
前の義子直平大
也政堂の異こと
こを点に胸隠を
此拾直平差拾こ
治堂の拾こ
り死んこと治の拾
歎
再び冊美こ治の偽
ここ治こ治こ
るこの又八さる畫拾十
拾中九七住ここの中林井洞の

[illegible]
[illegible]
[illegible]

けさうしめると山陽主人をいて世
洞の高眼ハ此ものを出すもとする花弦の
賞ス[illegible]ヒ[illegible]ヒ[illegible]ヒ

詩四五首

夏山雨后

清泉流石面飛濺
雨後峰巒樓枝一帳蒼風來
山谷南宗小宗

國井周助贈之意謝高意自製茶

除却茶鍋酒解醒
松窗三椀
睡醒午牧清
茶雲花別留香

閑居感懷

一間茅屋低一間
牡丹一朵又意
多少端午憶去年
楚艷吳歌
似西書

美人折花

手折海棠過碧紗
那顏折花
花多珠淚化清波
枝頭花
似美人美花

苦吟

不須古鏡與檢刀
閑落花來軍
氣豪性古休論攻
守策三十六計
不如此

村人庵に泊して余の書を需むる
が、ここに中ごろ余の書畫と燈籠と

氣豪快にして休論攻守策三十六計
不如逃

村人庵に泊まりて余の去を需むるあり
のみならず余の書畫を懇請す
と雖も余は遠方より飯を乞ひ
書畫を索むるもなほ懶惰の
題賛を需むるも時に辭して
出ずの十七日相と五日
相模相模も十一日なり皆成る此の
頃も海岸寺家に困しむ
文を十七日相模に辭し去らんとす
京比の恰も余の家の出でる冊
美濃北巷の忘辰と日中佛事
を営むを以て是非とも止めと爺然
庵に来り需めるに依て清
を乞ひ相模に帰るに
帰を拒まるや閑もなく冊美濃佛
事の為に北巷に出でる
九月十日美濃に別を告げ
途に上りぬ こんを伯清と為す
大正元年八月 [illegible]

錢

錢

大正元年八月

内看經

特別
14
1919
900

此義本邑文余の為めなる也

内看經

特別
14
1919
900

30

38- 9475